顔付」で太夫上八枚の位置の人でなければならぬが、茲に一つの異例を作つたのは、例の名人團平で、團平は可なりの進んだ頭を持つてゐた人だつたと見えるのは、彦六座で、住太夫が抜けたあとで、組太夫と大隅太夫(先代)とを交代の紋下にしようといふのが團平の説であつた。ところが當時の大隅太夫は「古老」であつて、「太夫上八枚」にはなつてゐなかつたので、大隅太夫の紋下には反對者があつたのでしたが、その時の團平の曰くに、「太夫上八枚」の適當なる人があるのを排するならばよくあるまいが、その人がない。私が大隅をと見立てたのに何が悪い理由を聞かうといふのであつたが、因會が當時の團平の腕には、二の句がつげず。大隅太夫と組太夫と打つてちがひに紋下となつてゐた。故に古來「古老」で「紋下」となつたのは、蓋し大隅太夫一人である。團平が組太夫を疎外したのには、組太夫の賭博好きが祟つたのです。

六、人形遣ひ位置の讀み方

文樂座の紋下に太夫、三絃、人形と、三紋下を初めて連名にしたのを明治十六年四月の松島における文樂座興行からであると、私はこの稿の第一回に述べましたが、その後「豐澤團平傳」を取調べてゐるうちに三味線が紋下になつたについての曲折の一つを知ることが出來たので、この件を再説しますと、

前にも述べましたやうに、大阪に商業會議所が出來た時に、税金徴收の關係から、紋下を各業の代表者と見て、三業の紋下を作ることとなつた。ところで明治十五年の末までは「實太夫の長登太夫」と吉田玉造とが紋下であつたが、後の攝津の越路太夫の人氣が昇る朝日の勢ひですから、紋下が三業となる機會に、長登夫太は引退して「後見」となり、紋下を越路太夫に讓ることとなつた。これが明治十六年の正月の事で、正月は文樂座の一座は、正月三日から京都四條北の芝居に出勤しました。今は南座だけが殘つて、北の芝居は無くなつたが、四條通りの今の南座の東、向ふ側にあつた芝居です。この京都の興行中に談合が一決して、明治十六年一月二十六日から松島文樂座で「實太夫の長登太夫」最後の紋下興行を行つた。この興行四十六日間の大入好人氣で打上げました。

で、次興行の四月がいよ〳〵三業紋下で團平が三絃紋下となることに決つた。ところで團平は、長登太夫の引退興行を、明治十六年三月十二日に打上げ、三月二十二日から十日間會津の小鐵の花興行で西京で興行してゐる。引續いて博勞町いなり芝居で、松島卯三郎といふ人の興行で素淨るり。四月十一日初日が松島文樂座本興行で、これが三業紋下の初まりだ。

ところで、私が所藏の番付では、この十六年の四月興行が、尙依然として長登太夫、吉田玉造の二業紋下となつてゐて、次興行の同年六月から團平の名を連ねた三業紋下になつてゐるのです。これを不思

議に思つてゐたのですが、今度團平遺族の手に殘つてゐた反古日記の類を全部で行李に三杯がほど借出して、一々に調べてゐるうちに、端なく發見したのですが、團平の妻女ちか女自筆の「大寶榮」と題する日記に據ると、「明治十六未四月十一日文樂初日出」といふ條に次のやうな記事がある。

出し物前大江山、內の役野崎、切國性也、此芝居初五分、紋下の事に付文樂ともめ言に相成すでに休行の處、文樂番付ほり直し急々氏太夫殿中に入事相濟候也（原文のまゝ）

即ち文樂座は四月十一日初日の興行を、太夫越路太夫、人形吉田玉造と二業の紋下にして、三絃の紋下を定まつてあつたに拘らず、古來前例のないことですから實行を又躊躇した。豐澤團平といふ人は、世事には無頓着な人で、又自ら報ずるところも薄かつた人であるが、三味線道のためには、斷乎として主張を曲げなかつた。決つたことはその職を賭しても爭ふといふ律儀な人でしたから、三絃紋下を初めに主張する機會を摑んだのは、前にも述べた如く、五代目豐澤廣助でしたが、文樂に對して實行を迫つたのは實に團平でした。「日記」にある氏太夫といふのは、當時の文樂座の頭取で、これが仲裁して番付をほり替へて發行するといふ事で事濟みとなつたので、私の所藏の十六年四月興行番付は、ほり替へない廢棄すべき番付でした。更らに今の豐竹古靱太夫が所藏の番付を借覽してみると、いかにも三業の紋下になつてゐます。この時の出し物は、日記にもある通り、前が「大江山酒顚童子」大序から四段目ま

で、中が「新板歌祭文」上下、切が「國性爺合戰」です。

この異つた二葉の番付の現存してゐることについて、團平の遺子加古平三郎さんの話には「文樂ではほり直しの番付を少ししか摺らないのか、まだ、訂正前のを芝居で多少使つてゐますと、父にいふと、それ位の事は、興行師の事だからするだらうと笑つてゐた」と當時の思出話を聞きました。

淨るり史上重要な一事項ですから、この點をハツキリとし、發見のエピソードをも、かう書添へておきます。

で、本題にお話を戻して「人形」の番付の讀み方、形式、變遷を述べませう。

人形の役割、人形遣ひの書き方は、古來二種あります。その一つは「人形遣ひ」を標準にして、人形遣ひの位置によつて、順位を定めて、各狂言の役名が、人形遣ひの頭について書くといふ書き方。即ち「忠臣藏」の由良之助も「娘八丈」のお駒も同じ人が遣へば、並んでゐるといふ人形遣ひ本位の書方が一つ。

今一つは各場割によつて、登場人形を主として書くから、由良之助が幾度も出る。從つてその人形遣ひも出る場〳〵に名を並べるといふ場割本位の書き方。——といふ風に二つがあります。場割本位に書

くと一目瞭然――現今の歌舞伎その他芝居と同じ書き方ですが、紙幅を多く要しますのと、人形遣ひの位置が番付面に明瞭でないといふので、樂屋は喜びません。場割本位の場合の番付は、歌舞伎の番付の如く、各場毎に登場人物と人形遣の配役を記してあるのですから、こゝには掲げません。

口繪の番付の場合で、人形遣ひの位置も、これで明かに示されてゐるといふ番付で、これも昭和六年十一月興行の時ですが、これが現在における文樂座人形の顔付です。これを見るとその各自の位置がハッキリと示されてゐるのです。

この口繪の寫眞の番付によつて説明しますと、三味線の場合にも述べました如く、外枠紅葉形の內側の太い一線が、こゝでも大切です。只三味線と違ふのは、三味線欄では筆上（ふでかみ）の第一行枠內の人から第一位として讀みます。卽ち筆上を高しとして筆上から始まつて千鳥に讀んで行きますが、人形の方は、筆下の位置が高い。筆下から始めて筆上へ行き、又筆下へ戻る。そして千鳥に綾に讀んで行くことは、三味線と同じです。

そこで、前に述べた本則を口繪の人形欄に當嵌めて說明しますと、現今の文樂座で第一位の人は吉田榮三です。卽ち筆下にゐます。芝居ならば座頭格。次が筆上の吉田文五郎で、この筆上のこの位置を「書出し」といふのですが、「文五郎」とその次の「玉次郎」との間に餘白を見せ間隔をとつてゐますから、

この場の文五郎の位置は「別書出し」といつてゐます。その意は、座頭の榮三と「別書出し」の文五郎とに大した差等を見ない。――が、さりとて座頭が二人あるわけもないから、持役の柄から見て榮三を座頭に、文五郎を「書出し」――優遇した書出しに据ゑてあるのです。で、次は文五郎が「別書出し」ですから、ホントの「書出し」は第三位の吉田玉次郎です。

次が中軸ですが――この中軸にいろ〳〵の場合がありますから、次々に説明しますが、この時の文樂では中軸が三人ある。卽ち「三人中軸」中央に左右多少の間隔を置いて吉田政龜、吉田玉七、吉田小兵吉とあるのが卽ち三人中軸で、この三人の位置は、中央政龜を第一、次に玉七、次が小兵吉といふ、中軸内で位置が定つてゐます。次が筆下二枚目の玉松、次が書出し二枚目の玉幸といふ風に下、上、下、上と讀んで行きます。

これが人形の顏付の讀み方原則です。そして例の例外がいろ〳〵と取除けられるわけになるので、卽ち太枠外に現在では桐竹紋十郎がゐます。これは人氣者で若い遣ひ手といふので、本欄に入れると位置は下り、顏が惡くなりますから、腕によつて優遇してゐること、恰も三味線の場合の仙糸、吉彌に匹敵すべき現はし方、優遇の仕方である。

太枠内に頭取吉田玉次郎とありますが、これは書出しの玉次郎が頭取を兼ねてゐるので、頭取といふ

のは、樂屋内人形の事務長乃至主事といふ役どころで、昔であるとよく當時の興行師が襲はれた、顔役なんどいふグズリを押へたりなどの外交もやつたのですが、現在では人形に關しての事務長、人形遣ひの人事課長といふところで、可なり難役です。相當腕があつて、しかも故實に通じて物を識つてゐないと勤まらない。例へば醫科大學の學長は行政出の事務の人でよかりさうなものだが、醫學博士でないと勤まらないと同じに、腕と故實に通じないと勤まりにくいといふ役柄です。

ところで、この番付の時の文樂座では中軸三人ですが、いつの時代もかうであつたといふのではありません。外の番付の例を御覽なさい。中軸の形式がいろ〳〵になつてゐます。昔のを見るとまだ玉藏がゐました。文三がゐました。辰五郎がゐました。今日の番付から見ると、僅か丸五年餘の相違ですが、これを見ても人形の凋落は實に心細い感じを起さずに止みません。

その頃の番付で、説明を要しますのは中軸の位置なのです。この「吉田文三」の中軸の形式を稱して「中軸一字」といふのです。即ちこの他は凡て役目のあるだけ、人形遣ひの名を一々記してありますが、この中軸一字の文三に限つて役目が御覽の如く、例へば眞柴久吉、親平作と二行に記して「吉田文三」と一字(一行の意)になつてゐます。この書き方は古來決して一人中軸で一字の場合はない書き方で、恐らく「吉田文三」唯一人が、今日までに得た一形式です。この形式を苦心して考へ出したのは、もと文樂

の番付編成係であつた清水といふ人の創案です。

この文三の「中軸一字」をどう讀むかといふと、位置は中軸であつて座頭とはなれぬが、座頭役を勤めて然るべき人だといふ意味を持たしてある。即ちこの時の番付の當時は、まだ〳〵人形のいゝのが、今日と違つて殘つてゐましたから、文三は座頭になれなかつたのです。さりとて、座頭格の吉田玉藏は謙遜な人であり、且つ彦六座から來た、文樂にとつては外様の人ですから、腕はあつても樂屋内の統率が難しかつた。で、最上級の大外枠、しかも右に張出してある。相撲でいへば、東張出し横綱です。この太枠外右へ張出しは、その道で最上級を示してゐます。そして、その番付を前に述べた原則から讀んでみるとかうなります。

即ち玉藏は別格の人、――一寸茲で思出したので一逸話を挿入しておきますが、先代吉田玉造は近世の名人で、三味線の名人團平とともに人形の紋下は、この人があとにもさきにも只一人の人形紋下で、幾多の逸話、名譽の藝談を殘してゐますが、この番付の玉藏は「玉造」を襲名したのですが先代玉造の遺族との間に、面白からぬ事があつて、音だけをとつた玉藏で死んだのです。――で、この玉藏を別格として、又辰五郎は古老の意味、文五郎は花形の意味で、何れも太線枠の外にゐます。そして、「中軸一字」が座頭格で、次が古老の吉田福壽軒、これは顔で筆下に坐つて、書出しが現在の座頭榮三、筆下

二枚目が今の書出し玉次郎。書出し二枚目が玉七といふ顔ぶれ、顔付です。現在の太線枠外の桐竹紋十郎は、この四年前は身分の低い處吉田簑助といふのがそれです。これらの異つた年代の顔付を照合なさるとほゞその讀み方の諒解がつくと思ひます。

今一つ中軸で申上げておきたいことは、中軸に三人並んでゐる現在の顔付(口繪の番付參照)政龜、玉七、小兵吉となつてゐますのが、政龜と玉七との間に空白が出來、政龜と小兵吉との間が又空白を設けてあけてある場合が古い番付に澤山あります。寫眞はかゝげませんが、一例は前に述べた長登太夫が、紋下引退の最終の番付を見ると、紋下の位置に吉田玉造及び筆下に左右の餘白をウンと設けて「局岩ふじ吉田玉造」とあり。中軸が吉田玉助、その前をあけて桐竹紋十郎、下を明けて豐松東十郎——即ち

雲ひめ	
乳母傳膳	桐竹紋十郎
おはつ	
織田信長	吉田玉助
松永大膳	吉田玉助

火車小次兵衞　吉田玉助
前田庄司　吉田玉助

几帳の前
慶壽院
母おさん　豐松東十郎
わしの善次

といふ風になつてゐる。これを「風鈴付中軸」と稱へてゐて紋十郎、東十郎が風鈴一字といふのです。

七、人形の發達と人形遣の風俗

こゝまでのところで、番付に對する一わたりの說明は致したと心得るので、つゞいて人形に關するお話を進めませう。

今日の三人遣ひにまで發達した人形の最初は何んなであつたかといふと、年代は詳かでありませんが傀儡師の人形から出てゐる。傀儡師が胸にかけた筥の內から今日の人形が飛出したのです。例の西宮の